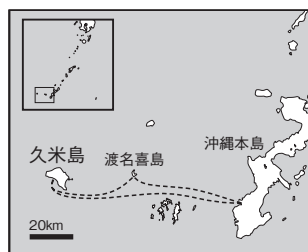


⑦ 久米島くめじま（沖縄県久米島町）——久米島高等学校

離島留学、町営塾、地域学 ——高校魅力化から島づくりへ

久米島高校魅力化事業支援員 山城 ゆい



久米島：隆起サンゴ礁や砂州（はての浜）など美しい景観を持つ島。面積58.94km²、周囲47.6km。人口8,133人（平成28年10月末現在）。平成14年に島の2つの村（具志川村、仲里村）が合併して久米島町となった。サトウキビや肉用牛など農業が主産業。

● 商工会なども協力して取り組む高校の活性化

那覇の西、飛行機で約三〇分の海上に位置する久米島。

琉球王朝時代は中国やアジア、日本との交易の中継地点として栄え、名前に「米」の字がある通りかつては稲作が盛んな豊かな島でした。現在は、農業を中心とする一次産業のほか、海洋深層水関連産業、観光業などが主要産業です。ピーク時は一万七〇〇〇人を超えた人口も、近年は毎年一〇〇人ペースで減少し、八〇〇〇人を割り込むまでになりました。

島に唯一の高校である沖縄県立久米島高等学校は、目の前に美しいグラデーションの海が広がる恵まれた立地にあります。一学年の定員は、普通科二クラス、園芸科一クラ

スの合計三クラス一二〇人ですが、最近では定員割れが続く、毎年の入学人数は八〇人前後を推移しています。

久米島町が高校魅力化に本格的に取り組み始めたのは平成二五年。きっかけは、その数年前に浮上した園芸科の廃科問題でした。園芸科がなくなりクラス数が減少すれば教員の数も減り、履修できる科目も減る。その結果、島を離れて沖縄本島の高校などへ進学する生徒が増える可能性があります。子どもを本島の高校に通わせる経済的負担は小さくなく、中には家族ごと転出するケースもあるため、人口流出を加速させかねません。

そこで、行政、高校、民間からなる「久米島高校の魅力化と発展を考える会」（以下、考える会）が立ち上がり、園芸科の存続と高校全体の活性化への取り組みが始まりました。



平成28年4月に完成した「じんぶん館」。久米島学習センター（町営塾）と離島留学生が暮らす町営寮が併設されている。

考える会の会長であり久米島商工会会長の嘉手苅一氏は、「島の人材を育てる高校の問題は、久米島の経済界、ひいては久米島の将来に関わる問題。商工会も無関係ではない」と、率先して地域をまとめ、高校魅力化を牽引してくださっています。

●寮と里親制度を併用した留学生の受け入れ

園芸科の存続がきっかけで始まった高校魅力化ですが、目的は高校全体を活性化させ、島の教育環境を充実させることです。そこで、全国各地で教育を通じた地域活性化に取り組む教育政策アドバイザーの藤岡慎二氏（株式会社Prima Pinguno代表）のアドバースのもと、大きく分けて三つ

のことに取り組んでいます。

まず一つ目が、平成二六年度より始まった、島外から入学生を募集する「離島留学」です。沖縄県では、生徒が県外の中学校出身で、保護者が県内に居住していない場合の沖縄県立高校への入学は、「その高校の所在地に身元引受人が必ずいること」という決まりがあります。その身元引受人を町が紹介するのが、久米島町の離島留学制度です。

新高校一年生を対象に、毎年一〇人程度を募集しています。当初、久米島高校には寮がなかったため、まずは身元引受人の家庭に留学生がホームステイする里親制度での受け入れを始めました。月額六万円のホームステイ料のうち二万円を町が補助しました。なかには島に住む祖父母や親戚が里親となってくれたり、保護者も一緒に移住したりするケースもありました。

そして三年目となる平成二八年四月に、念願の町営寮が完成。現在は寮を中心に、里親制度との併用で生徒を受け入れています。この寮は、久米島町交流学習センター「じんぶん館」の中にあります。「じんぶん」とは沖縄の言葉で知恵の意味。多くの生徒がここで切磋琢磨し、じんぶんをつけて世の中に羽ばたいて行きたいという願いを込めて名づけられました。元クリニクだった建物をリノベーションした館内は、一階が町営塾、二・三階が寮スペースとなっています。寮の運営においては大学や他の離島・

中山間地域の高校の寮でも実績のあるNPO法人NEWVERYと連携しています。

寮のコンセプトは「自分で探し、選び、決断する力を身につける」。寮長を中心に生徒たちが協力して、寮のルール決めやイベント企画などを行っています。寮には寮母さんのような役割のハウスマスターが二人常駐しており、保護者の代わりとして高校の行事や三者面談などにも参加します。



寮から通学する生徒たち。

ます。寮費は一日三食の食費込みで月額四万二〇〇〇円。食事は栄養士の管理の下、専門業者が毎日手づくりしています。開設初年度の入寮生は、新入生六人と里親の家庭から移ってきた二・三年生を合わせて一三

人。身元引受人さんが食事と呼んでくれたり、地元の漁師さんが釣ったマグロを持ってきて捌き方を教えてくれたりと、島ならではの生活を満喫しています。また、釣りや泳ぎが得意な生徒たちが、学校とは違う一面を見せてまわりを驚かせることもあります。

今年度現在の離島留学生は、里親制度、保護者と移住、寮生のすべてを合わせると二一人。その出身地は東京や神奈川、千葉、埼玉など関東がもっとも多く、次いで九州、沖縄本島となっています。毎年、夏休み前に東京や大阪などで募集説明会を開催していますが、年々参加者が増え、島の教育への関心の高まりを感じます。また夏休みや九月のオープンスクールに合わせて久米島へ足を運んでくださるご家族も多く、実際に入学される方の大半が、事前に島や高校を見学に来られています。筆者も、環境の違いなどを実感してもらうため、入学前（出願前）に一度は島へ来ることをお勧めしています。

●何日でも、何時間でも学習できる町営塾

二つ目の柱が、「じんぶん館」に併設された高校生対象の町営塾「久米島学習センター」です。平成二十七年四月にスタートし、民間の学習塾で長い指導経験のある塾長を中心に、全国から集まった五人の講師で運営しています。生徒の学力や通塾目的は幅広く、授業の復習や宿題をメイン

◆留学生たちの声◆

- 園芸科に入りたくて、神奈川県から入学しました。農業を通して食の安全に関わる仕事に就きたい。里親さん宅で農作業を手伝うのも楽しいです。
- 将来、離島の医療に携わりたくて、東京から入学しました。久米島高校は勉強に集中できる環境が整っていて、先生方も親身になってくれます。地域の方々が応援してくれているのを感じます。
- 生まれは東京ですが、花を育ててみたいと園芸科に入りました。ゴーヤなどを仲間たちと育てています。先輩たちも優しく、先生も面白い。楽しみながら学べるので、久米島で良かったなと思います。
- オープンスクールで農作業を体験して入学を決めました。園芸科の授業は過ぎる時間もあっという間です。今は室内装飾の資格の勉強もしています。昨年は県内の専門高校生が対象のグローバルリーダー育成海外短期研修に参加し、オーストラリアへ勉強に行きました。
- 県外生募集の新聞記事を見て説明会に行ったことがきっかけで、東京から入学しました。生物が好きなので、友だちと生物同好会を立ち上げました。東京ではあまりできなかった釣りや生物観察などをやりたいです。特に海洋生物が好きなので、干潮のときに海を見に行くのが楽しみです。
- 埼玉県から入学しました。久米島の魅力は亜熱帯植物が豊富なことと、人が温かいところだと思います。大学進学のために勉強を頑張り、また久米島の文化を学んでいきたいです。
- 親元を離れ、自分でどこまでできるかチャレンジしたくて久米島に来ました。ここでしか経験できないような地域の活動にも参加していきたいです。
- 高校生活の目標は、甲子園に行くことです。寮では同級生や先輩と気軽に話せて楽しいです。野球が忙しくなりそうですが、少しの時間でも町営塾に行けたらいいなと思っています。

にする生徒もいれば、受験勉強に励む生徒までさまざまです。そのため、個々のニーズに合わせてカリキュラムを組む自立型学習と個別指導を組み合わせた授業スタイルとし、目的に合った学習ができる工夫がなされています。また、部活動をしている生徒でも通えるよう開講時間は放課後から夜二一時過ぎまでとしております。部活を終えた生徒たちは、着替えもせずに真っ直ぐ塾に来て、腹ごしらえをし

てから授業に臨んでいます。費用は毎月の教材費が一・二年生は五〇〇〇円、三年生は七〇〇〇円となっており、週に何日でも、何時間でも好きなだけ来られるスタイルです。進路選択の重要な時期である高校三年間を離島で過ごすことの最も気がかりな点は、希望する進路の実現です。県外での募集説明会でも、この点を懸念される保護者が多くいらっしやいます。久米島学習センターでは推薦・AO入

試やセンター試験、一般入試にも対応した指導をしています。また、高校の進路指導部とも定期的に情報を共有し、先生方と一緒に生徒一人ひとりに合った指導やサポートをする体制を整えています。

● 答えなき問いに対する力を養う「ちゅらゼミ」

久米島学習センターのもう一つの特徴が、ゼミ形式の授業「ちゅらゼミ」です。これは、あるテーマについてグループワークやプレゼンテーションを行いながら、伝える力や聴く力、問題解決の方法などを学ぶ授業で、進路選択や社会に出てから必要となるスキルを身につけることを目的としています。平成三二年に予定されている大学入試改革（大学入試センター試験に替わる「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の導入、一般・推薦・AOという入試区分の廃止など）にも対応した内容となっており、今後の変化の激しい社会において、答えがない問いに対して答えを紡ぎ出す力を育てています。

町の皆さんも久米島学習センターで勉強する生徒たちを応援してくださっていて、ときどき授業を見学に来てくださいます。生徒たちも大人が見てくれていると励みになるようで、このときは普段よりも張り切って取り組んでいます。

こうした寮や町営塾の運営を可能にしているのが、総務

省の「地域お

こし協力隊」

制度です。平

成二八年度、

久米島高校魅

力化関連では

寮のハウスマ

スター二人と

「久米島学習

センター」の

講師五人を協

力隊として採

用しています。

彼らは沖縄が

好きという動

機よりもむしろ、高校魅力化という事業や教育を通じた地域の活性化自体に興味があつて集まったメンバーです。同制度が久米島町でうまく機能している秘訣は、そこにあるのではないのでしょうか。

● 課題先進地としての学習が可能な久米島

魅力化の三つめの柱が、「地域に関する学び」です。現在、



公営塾での学習風景。複数の講師が子どもたちを丁寧に指導。

◆里親からみた離島留学◆

久米島高校卒業を3月に控えた娘・寛恵が、「お母さん里親にならないの?」と聞いてきました。久米島高校が島外からの入学者を受け入れるために、里親を募集していたのでそう訊ねたようです。「いや、お母さんはあんたを卒業させたら少し休みたい」と、答えました。島の子どもたちは、高校を卒業したらほとんどが就職や進学のために島を出ます。子育ても高校を卒業させたら一段落なのです。島のための取り組みに対して「何かしないといけないかな」とかすかによぎりましたが「私がやらなくても誰かがやるでしょう」と、なるべく考えないようにしていました。というのも、夫婦共働きで帰宅時間が遅くなることも多く、里親は無理だと思っていたからです。

ところが後日、「一人の生徒の里親が決まらない」と校長先生が訪ねてこられたのです。初めて受け入れる島外からの入学者、一人でも受け入れを断れば、来年にはつながらないと一所懸命に話されました。そもそも、この事業は久米島の過疎化対策。毎年100人ずつ人口が減少し、高校の存続も厳しい状況のなか、島に高校がなくなるとさらに人口減少が加速します。そこで、久米島高校魅力化計画が始まり、島外からの入学者を受け入れることになったのです。たまたま久米島に赴任された校長先生が、こんなにも真剣なのに島人である私が断るわけにはいかない、と思い家族で話し合い里親を引き受けることにしました。

初年度は島外から5人の入学がありました。わが家に来たのは沖縄本島・北中城村きたなかの女の子・みのり。里親として決めたことは「わが子と同じように育てる」ということだけです。生活の中での問題

は、直接話して解決するようにしています。私の実家の行事でもうちの子たちと同じく手伝いをさせます。ある日、みのりが「友だちの家に泊まってもいいですか」と聞いてきました。「高校卒業するまでは外泊はだめだよ。寛恵たちもそうしていた」と許可しませんでした。彼女もその方針を受け入れてくれました。家族が一つになるためにはお互いの理解と努力が必要です。私が仕事で帰りが遅くなると、主人が食事の準備をします。塾の送迎、学校の行事も家族で協力します。そして、3年間久米島で学び、将来への道を切り拓くという一つの目標を家族みんなで目指しています。

北中城のみのりの家族とは、島に遊びに来た時や、私たちが沖縄本島に出かけた時などに一緒に食事をしながら、彼女の将来のことを話すことで、段々と一つの家族のようになっていきました。「みのりは一番の幸せ者です」という彼女のお父さんの言葉に、ほっとする思いがしました。みのりが「将来は島に帰ってきたい」と言った時は、特に嬉しかったです。たとえ現実にならなくても、久米島のことが好きになり「帰ってきたい」という気持ちになったことは素晴らしいことです。彼女もあと数カ月で卒業し、島を離れます。部活や塾があり、家にいる時間が短かったため、食事づくりを教えられなかった事が心残りなので、残された時間で少しでも伝えることができたなと思っています。これから将来を切り拓いていくみのりの人生に関われたことは、わが家にとってとても貴重な経験です。彼女が家族になったことを誇りに思います。

(久米島在住 平田光一・淳子)

久米島高校では、町のさまざまな課題について原因分析と解決策の提案を行う「まちづくりプロジェクト」を、総合的な学習の時間に取り入れていきます。少子高齢化や人口減少が進む久米島は、いわば課題先進国の中の課題先進地域。ここでの学びは、将来の日本社会だけでなく世界に出て活躍するうえで役に立つはずです。

また、久米島は海洋深層水による温度差発電（暖かい表層海水と冷たい深層海水との温度差を利用する発電方法。平成二五年、久米島に世界初の実用実証プラントが完成）をきっかけに、米国ハワイ州ハワイ郡のコナ地区と姉妹都市の関係にあります。そこで平成二五年度より、コナ地区の高校への短期留学制度を整備。町が旅費を九割補助し、毎年三人の生徒が約三週間ホームステイをしながら現地の高校に通い、英語や海洋深層水の活用などについて学びます。さらに、毎年コナ地区と久米島で相互に開かれる「海洋エネルギーワークショップ」では世界各国から集まった研究者や企業担当者に、高校生が考える海洋深層水の活用方法について英語でプレゼンテーションを行います。

●島で育成した人材が活躍できる地域づくりへ

久米島高校魅力化事業が本格的に始まって三年。最近町のあちこちで、高校が変わったね、という声を耳にします。それは、高校魅力化の取り組みが浸透するにつれて、島の

人たちの高校を見る目、意識が変わったということでもあると思います。唯一の高校を島の皆で盛り立て、子どもたちの教育の場を充実させると同時に、離島留学を通じて交流人口・関係人口を増やす。高校魅力化は、まさに島の将来を担う取り組みです。

今年度、久米島高校は創立七〇周年を迎えました。記念行事として開催されたシンポジウムに登壇した同校OBが、在校生に向けて「ぜひ一度は島を出て、できるだけ高く遠くを目指してほしい。そして皆さんが帰ってきたと思うときに迎えられるよう、レベルの高い産業・雇用を創るのが僕らの役目」とメッセージを贈りました。島の最高学府である高校教育の充実や人材育成は、教育だけに留まらず、育成した人材が活躍する場としての雇用、生活していくための経済、医療、子育て環境など、町づくり全体に関わってきます。メッセージにもあったように、久米島は今後の島づくりを真剣に考え行動している人が多い島。高校魅力化も、今後さらに多分野と連携しながら島づくりの一翼を担っていききたいと考えています。

山城ゆい（やましろ ゆい）

昭和57年神奈川県横浜賀市生まれ。東京大学大学院修了後、東京の国際協力NGOに6年間勤務。久米島町の地域活性に協力する知人のNPOを通じて久米島高校魅力化事業を知り、担当者として平成25年に移住。

◆島の学校からみた離島留学◆

久米島高校は離島の高校ですが、現在では以前ほど情報過疎ではなくなっています。職員配置も柔軟に対応されていますし、町営塾「久米島学習センター」ができてからは、高校とは違うアプローチを持った講師との交流もできるようになりました。ただ、どうしても本島で行われる研究会などに出席しづらいため、他の高校の先生方との生の情報交換の機会が少なく、視野が限られがちな部分はあります。

島の生徒たちは全体的にのんびりしています。離島ゆえ外からの刺激や、他校の生徒との競争が少ないからかもしれません。現在、卒業生の進路は大学進学、専門学校進学、就職がだいたい3分の1ずつです。自分の高校時代を振り返ってみると、進路意識を高めるには、保護者やまわりの大人が、夢やさまざまな職業観を日常生活の中で語ることが大切だと思います。

久米島高校魅力化事業が始まり、特に「久米島学習センター」ができたことで、生徒たちは県外の大人や、有名大学出身の講師など身近な成功例ともいえるべき人たちと触れ合う機会が格段に増えました。こうした他地域の大人と触れ合うことは、生徒たちにとってもよい影響をもたらす、離島のハンデを解消することにもつながります。

現在、島外・県外から本校に入学して



目の前に美しい海が広がる久米島高校。

いる生徒は21人いますが、みんな島出身の生徒たちに溶け込んでおり、特に違いが目立つことはありません。また島出身の生徒たちにも大きな変化は見当たりませんが、この事業の効果は短期間に出るものではないと思っています。たとえば今後、島外・県外生の人数が増えたり、卒業した留学生在が在校生に話をする機会を設けたりするなど、事業が継続されていくなかで、徐々に変化が生まれてくるのではないのでしょうか。

久米島高校で行う教育は、生徒に卒業後も島に残りなさいという教育ではありません。生徒たちの夢や進路の実現を応援するのが高校の役割であり、それがもし宇宙工学であればNASAを目指して飛び出したっていい。ただ、島のことを知って出ると知らないで出るとでは大きな違いがあります。現在、高校1年生の総合学習の授業では、島の史実に基づいた現代版組踊（沖縄の伝統芸能を基にした舞台劇）に取り組んでいますし、2・3年生は「まちづくりプロジェクト」として、自分たちが住む町の課題について調べ学習をしています。こうした経験を通じて久米島について深く知ることは、島への誇りにもつながります。

島の先輩たちの中には、久米島に他地域にも負けない産業・雇用をつくり、若者が安心して帰って来られる就業環境をつくろうと頑張っている方々がたくさんいます。また生徒たちの中には、地方行政や持続的な発展に関心を持つ生徒もいます。この子どもたちがいったん外に出て学び、将来島に戻りたいと思ったときに戻ってきて活躍できる場ができれば、久米島は本当にすばらしい町になると確信しています。

（久米島高等学校 校長 前川守克）